

大学は「組合」として はじまった

(第2回)

京大職員組合
研究紹介ミニ講義

文学研究科・川添 信介

2011年8月24日

話のおおよそ

- 自己紹介
 - 「大学」とはどのように始まったのか
 - どのように組織されていたのか
 - 学びのあり方
 - 「専門職」教育という使命 (ここから)
 - 「教養」という基盤
 - 現在の京都大学から見ると
-

前回のまとめ

- Universitas : 学問に関わる「人びとが」自発的に作り上げた団結的組織として始まった
 - だから、そもそも自治的で民主的な団体だった
 - だからまた、自由な討論を促すような教育方法をもっていた
 - しかし同時に、学ぶべき内容が固定的に組織されていた。特定の学問分野での「専門的知識の獲得」が団体の組織目的でもあった。
-

「専門職」教育という使命(1)

- 中世の「大学」の本来の組織目的は、「教える資格」=学位を与えること。
- Master (Magister) とは、特定の学問分野についての「親方」の意味
パン屋の組合(ギルド)と同じように
- Doctor とは、「教える人」の意味

← 学ぶべき知識が固定していること

「専門職」教育という使命(2)

- 中世の大学で教えられていた知識は「専門職 Profession」につながっていた。
医師・法律家・聖職者
 - 何らかの意味で、次の要件が必要
 - * 専門的知識についての資格審査
 - * 同業者の団体への加入
 - * 専門職倫理遵守の誓約
-

「専門職」教育という使命(3)

- Professorとは「前で＋語る人」「誓約する人」
 - DoctorがProfessorであることの意義：
高度な専門知識を身につけた者は、その知識を倫理的に用いる義務を負うと公的に宣言する者
 - 現在の大学人はどうだろうか？
「原子カムラ」の人々
-

「教養」という基盤(1)

- しかし、中世の大学には専門職教育とは別に、「学芸学部 *facultas artium*」があった。
 - 古代ギリシアからの「自由学芸 *artes liberales*」の伝統
 - 三科(文法・修辞学・論理学) → 文系
 - 四科(算術・幾何・音楽・天文) → 理系
-

「教養」という基盤(2)

- なぜ「自由」学芸なのか？
 - 奴隷ではなく、「自由人」がもつべき知識・教養
自由人＝公共の事柄(政治)に関わる責任ある人間
 - 専門知識にとっての基礎知識であるとともに、
専門知識を正しく用いるための「技(art)」
→次回の伊勢田さんの「クリティカル・シンキング」
-

「教養」という基盤(3)

- 中世の学芸学部は、実質的にアリストテレス哲学を学ぶ場。
 - そこには倫理学・政治学も含まれていた。
 - 専門知識を「正しく」用いるという倫理性・社会性
-

現在の京都大学から見ると(1)

- 話が飛びすぎ。
京大(日本の大学)の直接の先祖は、19世紀ドイツのフンボルト型大学
 - 国民国家としての日本が国家のために創設した大学
 - とはいえ、東京帝国大学とは違ったあり方を目指した。
-

現在の京都大学から見ると(2)

- 日本では、「組合」としての大学の性格はそもそも弱い
 - しかし、法人化は「組合」的あり方への回帰？
 - とはいえ、「組合」はまずは「人の結合体」であった。
現在の京大はどれだけ人を大事にしているか？
-

現在の京都大学から見ると(3)

- 「自由の学風」をどう考えるか
これは「研究と教育の一体性」という理念
 - 法人化前後から必ず「教育・研究」と教育が先に
これは中世の大学のあり方への回帰の面？
 - 最近の「学士力」という考え方も中世的：
標準化された知識・能力を判定する
(EUのボローニャ・プロセスも)
→ これらは「自由の学風」とはちよつと異質
-

一応のまとめ

- 中世が大学の始まりだから、そこに戻れば良いということではない。当たり前。
 - しかし、「そもそも大学って何？」と大学人は考えるときには、知っておいた方がいい。
 - 誰でも問題にすることだが、「教養教育と専門職教育との関係をどう考えるのか」、あるいは「大学における教養教育とは何か」は、やっぱり基本的問題。
 - さらにさかのぼって、「社会全体の知にとって大学という場が果たすべき役割とは何か」という問題
-

参考になる書物

- 吉見俊哉『大学とは何か』(岩波書店)2011年
 - ジャック・ヴェルジェ『中世の大学』(みすず書房)1979年
 - 田中峰雄『知の運動—十二世紀ルネサンスから大学へ』(ミネルヴァ書房)1995年
 - 児玉善仁『イタリアの中世大学 その成立と変容』(名古屋大学出版会)2007年
-